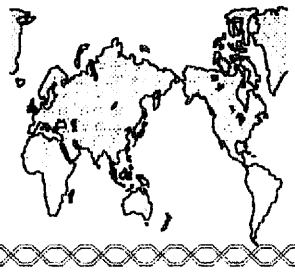
平成１１年３月２０日　発行　会長　山内　武道

北海道国際理解教育研究協議会　会報



第４３号

事務局長　高橋　承造

皆様のご支援とご協力に感謝して…

＝各地区での研究実践のいっそうの充実発展を＝

北海道国際理解教育研究協議会
会長　山内　武道

今、世界には多様で複雑な状況が存在し、急激な変化も遂げています。その様な中で日本の国が果たす役割は益々大きくなり、国際理解教育の充実が期待されています。

それに応えて、北海道の国際理解教育がここ数年急激な発展を遂げ、全国的にも大変高い評価を受けています。研究内容の面・研究組織の面、共に、全国で最も充実していると言っても過言ではありません。今後も、全国の国際理解教育の指導的な役割を担っていくことが求められています。

これは確かな実践を基にした全道各地区の皆様の熱意に溢れたご支援とご協力の賜物であり、北海道教育の実力を示すところでもあります。

この様に、今、国際理解教育が脚光を浴び、前進を続けていますが、各教科・領域においても国際理解教育の重要性が認識され、研究が進むことと思います。

もちろん、国際理解教育が特別の内容ではなく、当然の教育として全領域で指導されることが究極の目的であります。しかし、現在の状況のもとでは、本研究協議会が先導的な役割を果たし、進むべき方向性を明らかにしていかなければなりません。

そのために、今後も、北海道国際理解教育研究協議会が研究実践を最も大切にする会員の集まりであり、それを最優先する研究団体であることが求められます。

私はこの重要な時期に、本会の重責を３年間にわたって担わせていただきました。力不足で皆様には大変ご迷惑をおかけしましたが、温かいご支援とご協力を賜り、その間、全道大会を２回、一昨年は全国大会を釧路で開催させていただき、大きな成果を得ることができました。多くの参加者があったことはもちろんですが、授業実践と分科会での研究討議の内容が素晴らしい充実を遂げたことが、何よりも喜ばしいことです。

北海道教育の“授業実践の成果を最も大切にする”という考え方は、他の都府県の範となるものであり大きな誇りでもあります。

今、北海道の教育界には、ややもすると子ども不在の論議や対立があることも否定できません。そのことによって子ども達に大きなしわ寄せがいき、それが、心配されている教育上の問題の要因となっていることも忘れてはなりません。

今後も、国際理解教育研究協議会に参加する皆さんが、子どもを中心にすえ、“子どもにどんな力を身につけ、どんな人間に育てていくか…”という視点で研究実践を進めていただくことを心から願っています。

お世話になりました多くの皆様に心から感謝申し上げ、退任に当たってのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

新研究決まる・『冬の学習会』99. 1. 13

全道各地区の研究部長が集まり、第５次研究の総括と第６次研究の内容・研究主題について検討がなされ、新しい研究の方向性が決定しました。

第5次研究　⇒⇒⇒　第6次研究

＜研究期間＞

第5次研究	第6次研究
平成　8年度	平成11年度
平成　9年度	平成12年度
平成10年度	平成13年度

＜研究主題＞

第5次研究	第6次研究
広く世界に目を開き、豊かにたくましく生きる児童生徒の育成	広く世界に目を開き、未来を切り拓く児童生徒の育成

平成11年度　理事会総会　終了する

期日　平成11年1月14 日(木)
場所　札幌市立真駒内緑小学校

＜報告事項＞
- 平成１０年度会務事項
- 平成１０年度各部の活動報告
- 平成１０年度決算報告
- 第１９回全道　研究大会後志大会終了報告
- 第２０回全道研究大会北見大会について
- 海外教育事情研究会との連携について
- 派遣教員及び帰国教員研修会・激励会について

＜審議事項＞
- 平成１１年度運営計画について
- 平成１１年度事業計画について
- 平成１１年度各部活動計画について
- 平成１１年度予算案について
- ホームページについて
- 会長選出

※新会長には、現事務局長である高橋承造先生が就任することが決まりました。

平成10年度在外教育施設帰国教員
平成11年度在外教育施設派遣教員　研修会

期日　平成11年1月14日(木)　理事会総会終了後
場所　札幌市立真駒内緑小学校

本協議会主催に変わって2年目の研修会でしたが、時期的にも冬季休業中ということで、多くの先生方の参加を得て開催されました。

＜平成１０年度帰国教師＞

川崎　真　(札幌市真駒内緑小)　ブルネイ補修校
広島　直　(札幌市みどり小)　バンドン日本人学校
田中　雅志　(月形町月形小)　ドーハ日本人学校
中川　勝美　(新十津川大和小)　ｸｱﾗﾙﾝﾌﾟｰﾙ日本人学校
真鍋　豪　(旭川市東鷹栖中)　台北日本人学校
鎌田　優子　(旭川市立忠和小)　ミラノ日本人学校
高木　司　(旭川市光陽中)　マナオス日本人学校
石田　篤司　(斜里町朝日小)　ﾖﾊﾈｽﾌﾞﾙｸﾞ日本人学校
鞠子　順一　(追分町追分中)　マナオス日本人学校
堀田　稔　(室蘭市北高平小)　サン・ホセ日本人学校
久永　恵子　(帯広市柏小)　バンコック日本人学校
松村　正仁　(帯広市第六中)　台北日本人学校
辻口　悟　(帯広市西小)　ヤンゴン日本人学校
大森　伸　(標茶町標茶中)　ﾛｽｱﾝｼﾞｪﾙｽ日本人学校
伊藤　賢次　(釧路市鳥取中)　ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ日本人学校
荒川　浩一　(釧路付属中)　香港日本人学校
飯田　輝雄　(標茶町標茶小)　テヘラン日本人学校

＜平成１１年度派遣教員＞

島谷　征一　(ローマ日本人学校)
氏家　裕子　(ｸｱﾗﾙﾝﾌﾟｰﾙ日本人学校)
合田　一美　(マニラ日本人学校)
千代　隆志　(シドニー日本人学校)
保木千寿子　(ブラッセル日本人学校)
今野　浩義　(ロンドン補修校)
佐藤　寛之　(ｸﾞｱﾃﾏﾗ日本人学校)
正古　信夫　(シカゴ日本人学校)
加藤　和弘　(ﾆｭｰﾃﾞﾘｰ日本十学校)
池田　勝徳　(日本メキシコ学院日本コース)
間瀬　龍生　(ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ日本人学校)
渡辺　幸司　(台中日本人学校)
中谷扶美子　(カラカス日本人学校)
相馬　充子　(ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ日本人学校)
大澤　潤　(バンコク日本人学校)
堀　保夫　(バンコク日本人学校)
梅津　和広　(ﾛｯﾃﾙﾀﾞﾑ日本人学校)
河原　宣孝　(ﾃﾞｭｯｾﾙﾄﾞﾙﾌ日本人学校)
森　雅彦　(ミュンヘン日本人学校)

石狩地区研究の取り組み

1　研究部活動計画

(1)　平成７年度第６回石狩管内国際理解教育研究大会の成果を発展させ、課題を引きついてその解明を目指す。

(2)　理論研修会と授業研究を含めた研究大会の２本立てとする。

(3)　石狩管内における実践研究の普及に努めるため、石狩としての基底カリキュラム作りに着手する。

2　研究主題

「豊かでたくましい心をもち　世界に目を開く子供の育成」
～学校全体における実践の拡大を目指して～

3　大会主題　　設定の理由

新学習指導要領は、「２１世紀を目指し社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間」を目指すべき人間観としています。この「社会の変化」を私達の研究の基盤であります「国際化」に置き換えますと、本研究大会の立場は、「２１世紀を目指し国際化に自ら対応できる心豊かな人間の育成」となります。これが大会の研究主題の「豊かで」の根拠であります。

「たくましい」は、学習指導要領改定の基本方針の①の「心豊かな人間の育成」の具体的概念として示されている「豊かさ」と共に「たくましさ」が社会の変化に主体的に対応できる日本人になるために必要なものである、としめされているところを根拠にしています。豊かさと同時にたくましさを持った心が、変化する社会、特に国際化時代の日本人には不可欠な要素と捉えた訳であります。

後段の「～世界に目を開く子供」については、改定の基本方針の④「文化と伝統の尊重と国際理解の推進」を根拠にしています。

即ち、国際化が進展する中にあって、次代に生き、世界の中で尊敬され信頼される日本人を育成するためには、これからの学校教育において、諸外国の人々の生活や文化等に対して目を開き、それらを理解し尊重する態度を、幼・小・中・高等学校の全ての子供たちに育成することが求められているからです。

この子供たちの目を、こと国際理解教育に関して、身近なところから北海道全体へ、さらに日本全体へ、日本から世界へと、次第次第に「世界へ目を開かせること」が大切なのであります。

また、「児童・生徒」ではなく、「子供」としたのは、幼・小・中・高の一貫性のある教育が、今次教育課程改善の重要なねらいの一つでもあることから、「幼児」も含めた「子供」という大きな表現に統合したものです。

副主題の「学校全体に置ける実践の拡大を目指して」については、幼稚園・小学校・中学校・高等学校に於て国際理解の実践が展開されればという祈りを込めて設定しています。

旧態依然とした感覚、体制では国際理解教育を推進することはできません。推進できるかどうかは、教師の意識変革にかかっています。興味や関心のある先生に任せて置けばよいというものではないのです。

２１世紀の明日に向かって、世界に向かって育つ全ての子供たちのために、学校全体としての体制を整え、全教師による国際理解教育の実践の拡大を目指すことを打ち出しています。

4　研究の具体的な内容

(1)　平成１１年度　在外教育施設派遣教員の候補者のための　事前研修会

①目　的

・管内における国際理解教育の充実と普及の拡大を目指すため、後継者の育成。

②日　時　　平成１０年８月２９日（土）　１３：００～

③会　場　　江別市立大麻中学校　校長室　相談室

④内　容

◦学習会　「国際理解教育の取組等」

◦座談会　「海外教育事情等」

(2)　北海道国際理解教育研究協議会　研究部会

①目　的

・事務局と地区研究の一体化を図りながら研究大会を実施し、主題解明とともに各地区研究大会の交流と国際理解教育の実践の普及と拡大を目指す。

②日　時　　平成１１年１月１４日（木）　１４：３０～１７：００

③会　場　　札幌市立真駒内緑小学校

④内　容

◦研究協議　「第６次研究主題について」
各地区の研究推進について

(3)　石狩管内国際理解教育研究集録作成への着手

①　目　的

・１０年の節目にあたり、今までの研究の歩みをまとめることにより、成果と課題を明らかにして、新しい教育課程の実施に向けて方向性を探っていく。

②　内　容

・平成６年度の全道大会石狩大会の研究紀要及びそれ以後の管内大会の資料を基に、本会の研究の質的充実と管内における国際理解教育の普及にしするため、石狩管内の国際理解教育の研究収録の作成を行う。尚、「総合的な学習の時間」など教育の動向を見据えた内容になるように努める。

＊基底カリキュラムも作成内容に盛り込む。

第５次研究の成果

Ⅰ国際理解の目標をどうするか

広く世界に目を開き
豊かに・たくましく生きる児童生徒の育成

国際社会で生きていく姿
地球的な視野から世界をながめ，自分の地域や生活を振り返ることで
①人間として責任ある行動をとる。
②共生の心を育てる。
③違いを違いとして理解し，互いを尊重する。
④主体的に自分を表現する。

人間として責任ある行動をとる。
（行動）

札幌

釧路　連帯意識・協調・参画意識

後志　国際貢献

共生の心を育てる。
（価値）

札幌　同じ人間として，他者の存在を認め，信頼関係を築く

釧路　人権意識の涵養
平和を愛する心

後志　人間尊重の精神

違いを違いを理解し互いに尊重する
（理解）

札幌　お互いのよさを認め合う子

釧路　自国認識と国民的自覚
他国・異文化の理解，寛容性・礼儀
教養

後志　自国文化，異文化理解

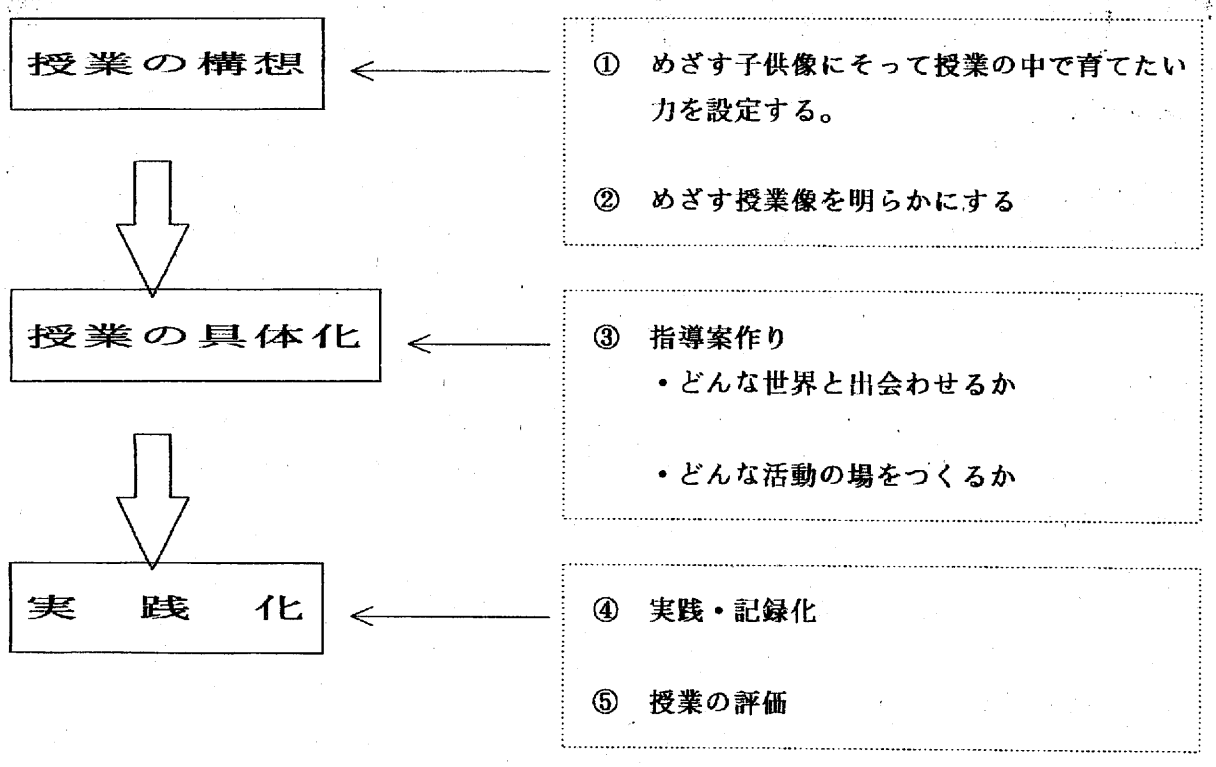
主体的に自分を表現する
（方法的な能力）

札幌　自分の考えを表現し，意思を通い合わすことができる子

釧路　コミュニュケーション能力，交流意識態度

後志　豊かな表現

Ⅱ　国際理解の授業づくりについて



①②　についての成果

- 「めざす子供像」や「具体的な目標」をつくることで，国際理解教育を進めることによって子供たちの育成したい資質・能力を整理することができた。
- 授業作りにあたっては，子供の実態，地域の実態，そして国際理解の目標をもとに，「これでなにが育つのか」「なにを育てようとしているのか」という授業の目標を明らかにしていく。

③についての成果

- 自分で考え，そして，自分の足元から行動していくためには，自分の生活とのかかわりから地球を意識させていくことが大切である。そのためには，教材化にあたっては，地域に目を向け，地域の中から教材化していくことが必要である。
- 理解から学び合いへ

国際理解教育では，子供たちが主体的に学びを進めていくことが大切である。そのためには従来のように，理解していくことをもとめるのではなく，「探究活動」「共同活動」「表現活動」「対話「体験」「討論」など多様な活動の場をとりいれながら子供たちが自ら問題を解決していく学び合いが必要となる。

⑤についての成果

何かを覚えたというより，学んだことがどのように転移し，行動に移ったたかということが大切である。

第6次研究推進計画

I　研究の方向

1，第5次研究から

(1)　研究の推進について

・「異文化とのかかわり」に注目し，子供が国際社会に生きていく「人間としての生き方」を考えていく研究の推進

(2)　研究内容から

・理解にとどまらす，具体的な体験や活動をしながら問題を解決していく場の構成

・地域に目を向け，子供たちが自分の足元から世界へ視点を広げて行ける教材の開発

・国際理解教育を総合学習とすすめていくための方向

2，日本の教育界の要請（教育課程の基準の改善から）

(1)　**基本的な考え**から

・「時代を超えて変わらない価値あるもの」を身につける

・社会の変化に柔軟に対応し得る人間の育成

(2)　**改善のねらい**から

①豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること

②自ら学び，自ら考える力を育成すること

③ゆとりある教育活動を展開する中で，基礎・基本の確実な定着を図り，個性を生かす教育を充実

④各学校が創意工夫を生かし特色ある教育，特色ある学校作りを進めること

(3)　**課題に関する基本的な考え**から

国際化への対応

イ広い視野をもって異文化を理解し，異なる文化や習慣をもった人々と偏見をもたず自然に交流し共に生きていくための資質や能力の育成を図る。

横断的・総合的な学習，教育課程の基準の大綱化・弾力化

カ「総合的な学習の時間」の創設

3，国際理解教育の新たな方向性から

(1)「地球市民」の育成をめざす→地球に生きる者同士の運命共同体の自覚

グローバル・コンセプト（1994　ユニセフ　開発のための教育から）

①相互依存　②イメージと認識　③社会正義　④対立とその解決　⑤変革と未来

(2)　自国文化と異文化の理解という文化レベルから「自己の確立」と「共に生きる」という主体的な人間のレベルへ

(3)　「目的」から「手段」としての国際理解教育へ

自ら社会的な課題を見出だし，解決法を模索し，未来への展望を持つ

Ⅱ研究主題

広く世界に目を開き未来を切り拓く児童生徒の育成

子供の「異文化」とのかかわりに注目しながら，子供たちが，一人の人間として，２１世紀の地球社会において責任ある役割を担い，実行していく生き方を選択できるようにする。

そのために，私たちは，子供たちが，地球市民として考え，感じ，そして行動していける生き方を探ったいくことにする。

広く世界に目を開き　とは

「広く世界に目を開き」とは，２１世紀をひかえ，好むと好まざるにかかわらず，宇宙船地球号の一員として，全ての人間，全ての地域がかたく結ばれ，互いに影響を及ぼしている状況を踏まえ，この状況を子供たちとともに学んでいくことが必要だと考えたからである。

子供たちは，「広く世界に目を開く」ことで，自分と異なった文化や，異なった信条や価値観と出会う。この出会いを通して，子供たちは異文化に興味を持ち，様々な生活や文化，そして，そこに暮らしいる人々の多様な生き方を理解し，尊重できるようになる。

多様な生き方との出会い

子供たちは，予想もしなかったものに出会うと，まず，自分との違いに目をむがちである。多様な文化を理解し尊重するには，この違いを異質なものと排除するのではなく，まず，違いを自分とのかかわりの中で十分に認識し，「違う」ことが当たり前だということを実感させることが大切である。

違うことを豊かさへ

自分と異文化との「違い」を実感した子供たちは，自分と異文化を同じ価値として認めることができるようになる。この結果，「違う」ことが当たり前と考えるようになる。そして，「どちらが優れ，どちらが劣っている」というのではなく，違いを違いとして理解し，互いを尊重し，「違い」の中に多様な価値を発見していけるようになる。

共に生きる

様々な異文化との出会いやかかわりを通して子供たちは，人と人の関係の在り方や自分を見つめ直すことになる。そして，自分の良さに気付き，アイデンティを確立していく。

そして，「違い」に対して，主体的に対応することができるようにをなった子供たちは，問題解決にあたって，一つのものの見方や考え方にとらわれることなく，共に学び合い，そして，共に分かりあえる解決方法を探っていくことができる。

未来を切り拓く

子供たちが，これから生きていく２１世紀は変化の激しく，予想のつかない，厳しい時代であろう。

「未来を切り拓く」とは，このような時代の中において，「人間」として生きていくためには，自分の生き方に，自ら課題を持ち，未来に主体的に行動することが必要だと考えたからである。

世界に目を開くことで，今生きている世界をしっかりと見つめることができた子供たちは，どんな未来を創造するのか自分のビジョンを持つことで，「地球村」に生きていく力を身に付け，様々な問題の解決に向けて行動できるのである。

人間として行動

「教育の在り方は，すべての未来をどうとらえるかから始まる」という，トフラーの言葉に代表されるように，子供たちに，自分達の未来を描く力をつけることは学校教育の目的であろう。

子供たちは「未来」を描くことで，異なることが豊かさと受けとめられる社会の姿や，一人一人の人権が大切にされた平和な地球の姿を自分とのかかわりの中でイメージできるようになる。そして，その「未来」を築くために，自分は社会とどうかかわっていけばよいのかというように主体的に社会にかかわっていけるようになる。このかかわりを通して人間としての生き方を学ぶことができる。

行動すること

環境問題の大切さやリサイクルの必要性を理解していても，飲んだあとのアキカンをポイ捨てしていたのでは困ったものである。このように，これから子供たちが直面する問題は，環境，人口，人権，平和問題のような地球規模の課題は，いくら知識や態度が身に付いても，自ら問題について解決しようとする行動に結び付かなければ意味がないのである。

私たちは，子供たちがグローバルな見方から問題について自分の考えや判断できるだけてなく，問題解決にむけて，自分とかかわりのある生活からまず責任ある行動できるようにしなければならない。また，そうしなければ，２１世紀の人類は立ち行かないといっても良いだろう。

自分を表現する

子供たちは，一人ではなく，仲間とともに問題に立ち向かうことになる。その時，すぐに解決の道を見出だすことは容易なことではない。まず，相手の立場にたって，立場を配慮しながら，自分の考えや意思を相手に正しく伝え，そして相手の考えや意思を正しく受けとめることが必要となる。

そのような交流の後，自由なに意思疎通が生まれ，共に生きるものとしての関係が生まれ，問題に対してみんなが納得する解決方法を生み出すことかできるのである。

このように，だだの伝達ではない，異なる考えを持つものとの心の通じ合いか生まれる表現を探っていかなければならない。

ＩＥフォーラム

この頃，興味深く見ている番組がある。「ここがヘンだよ日本人」である。この番組は，在日外国人が，感じている日本人についての意見を発表し，それについて日本人であるコメンテイーが反論をしていくものである。

登場する外国人の多国籍ぶりと日本語の上手さにいつも驚かされるが，やはり「そこまで言う。」と思わせるほど，彼等は日本人の差別意識や文化の違いなどについて指摘をする。正直見ていると思わず「何をいってる。」とつい腹を立ててしまうほどである。

確かに，番組としては，感情むき出しにして討論している姿に，「日本人」としてのアイデテイをくすぐることで視聴率が上がるのかもしれない。

しかし，「異文化との出会い」をテーマにしている，いままでにない画期的な番組なのに，互いの文化を尊重し，学び合おうとする姿勢がないのはどうしてだろう。そこに，今の日本人の異文化のとらえを見てしまう。

新しい指導要領のなかでも外国の文化・生活に慣れ親しむことなど国際理解教育の推進をうたっているが，紹介した番組のように，自分たちの文化の自己主張にならないよう子供たちの異文化との出会いを考えていかなければならない。

図書紹介

イスラームと国際政治
－ 歴史から読む －

山内　昌之（やまうち　まさゆき）
岩波新書

著者紹介　1947年生まれ　東京大学

国際関係史・イスラーム地域文化について研究をしている。カイロ大学客員助教授を勤めるなどイスラム文化に生活した経験を生かし，イスラム文化と国際政治の関わりについて多くの発言をしている。

湾岸戦争，旧ユーゴの内戦，など地域紛争の主な要因として，民族・宗教問題，特にイスラムに対する注目が高まっている。アジア・アフリカ・そしてアメリカに広がるイスラムのネットワークはこれからの21世紀の世界を考える時のポイントになると考える。

「構わんから殺してしまえ。信仰なき者どもにはそれが相応の報いというもの」などのコーランの教えに現れているように，異教徒にとってはなかなか理解できないイスラム文化であるが，本書では，歴史的視点にすえながら中央アジアや中東の政治の流れを説明しているので，具体的に論が進められおりとても分かりやすい。

また，第Ⅳ章「歴史を見る眼」では，私たちの生活の中にあるイスラム文化との関わりを紹介し，よりイスラム文化との距離を近いものにしてくれる。